

1 発見銅鐸の概要

(1) 発見の経緯

- ①平成27年4月8日、南あわじ市の株式会社マツモト産業の加工工場の砂山（※）で同社社員が銅鐸2口（点）を発見。連絡を受けた南あわじ市教育委員会職員が翌朝銅鐸であることを確認した。※ここ数年の間に市内の複数の場所から運ばれて、砂利等との分別のために一時的に積み上げたもの。
- ②南あわじ市教育委員会が4月9日から資材置場を精査したところ、5月1日までにさらに5点がみつきり、合計7点を発見した。

(2) 評 価

- ① 銅鐸7点がまとまってみつかるのは、加茂岩倉39点（島根県）、大岩山24点（滋賀県）、桜ヶ丘14点（兵庫県）に次ぎ、4番目に多い。

淡路島内で発見された銅鐸は、今回の7点を加えると現存銅鐸で計14点、伝承を加えると計21点となる。

- ② 1号銅鐸は菱環鈕（りょうかんちゅう）2式、残りの6点は外縁付鈕（がいえんつきちゅう）1式であることが確認できる。

菱環鈕式銅鐸は銅鐸の中でも全国で11例しか確認されていない最古段階（弥生時代前期末～中期初頭、紀元前2～3世紀）の銅鐸であり、淡路島内では洲本市中川原銅鐸に次ぎ2例目である（県内では3例目）。

複数の銅鐸がまとまって見つかった例のうちで菱環鈕式を含むものは、神庭荒神谷（島根県出雲市）について2例目である。

外縁付鈕1式以前の古い段階の銅鐸だけがまとまって見つかるのは大変珍しい。（他は島根県神庭荒神谷（6点）、兵庫県宝塚市中山銅鐸（2点）のみ。）

【銅鐸の形式分類】

形 式		鋳 型	時 代	
菱環鈕式	1 式	石製鋳型	弥生時代前期	
	2 式			
外縁付鈕式	1 式		土製鋳型	弥生時代中期
	2 式			
扁平鈕式	古段階			
	新段階			
突線鈕式	1 式	土製鋳型	弥生時代後期	
	2 式			
	3 式			
	4 式			
	5 式			

- ③ 7点のうち内部が確認できた3点については、銅鐸を鳴らすための青銅製の舌（ぜつ）を伴っている。（残りの4点は内部に砂が詰まっているため未確認。）

銅鐸とセットで確認された青銅製の舌は全国でも2例（3点）しかなく、全国的に見ても貴重なものである。

- ④ 発見された銅鐸は非常に保存状態が良く、7点のうち3組6点については、大きい方の銅鐸の内側にひとまわり小さい銅鐸がはめ込まれた入れ子の状態で発見されているが、入れ子状態が保たれているのは大変珍しく（他には島根県加茂岩倉遺跡の13組26点のみ。）、今後の調査で銅鐸の埋納状態が復元可能となるなど貴重なものである。

2 全国と兵庫県の銅鐸出土点数

(1) 銅鐸出土点数（今回の出土点数含む）

全 国	兵庫県	うち淡路
532点	68点（全国1位）	21点
※他府県：島根県(56点)、愛知県（55点）、大阪府(41点)、滋賀県(40点)、徳島県(39点)		

難波洋三 2006「難波分類による銅鐸出土地名表」を基に今回の出土点数含めて集計。

3 今後の対応

(1) 銅鐸について

- ・現在は遺失物として兵庫県南あわじ警察の管理下にあるが、奈良文化財研究所に協力を要請し、文化財としての保存上必要な内容について調査を行う。
- ・銅鐸の帰属が確定したのち、本格的な調査研究に着手する。

(2) 出土地について

- ・松帆地区では、これまでに中ノ御堂で銅鐸8点が出土したという記録が残るほか、慶野でも銅鐸が1点、古津路でも銅剣14本が出土するなど、弥生時代の青銅器が集中して出土地している。
- ・本来の出土場所は今のところ特定できていないが、採掘した砂中からみつかることから、南あわじ市松帆地区のどこかである可能性が高いと考えられることから、今後追跡調査する予定。

新 発 見 銅 鐸

	型 式	文 様	法 量			備 考
			高 さ	底 幅	重 さ	
1号銅鐸	菱環鈕2式	横帯文	26.6cm	15.5cm	1,965g	舌を伴う
2号銅鐸	外縁付鈕1式	4区袈裟禪文	22.4cm	12.8cm	1,090g	舌を伴う 1号に入れ子
3号銅鐸	外縁付鈕1式	4区袈裟禪文	31.5cm	17.5cm		
4号銅鐸	外縁付鈕1式					3号に入れ子
5号銅鐸	外縁付鈕1式	4区袈裟禪文	23.8cm			破損
6号銅鐸	外縁付鈕1式	4区袈裟禪文	31.8cm	18.5cm		
7号銅鐸	外縁付鈕1式					6号に入れ子

舌(ぜつ)

	長 さ	重 量
1号舌	13.0cm	127g
2号舌	8.0cm	45g
仮3号舌	12.0cm	80.0g



1号(右)・2号(左)銅鐸
1号(右)・2号(左)舌



3・4号銅鐸



5号銅鐸



仮3号舌



6·7号銅鐸

淡路島出土銅鐸一覧表

No.	名称	型式	文様	法量	出土地	出土年	出土状況	所有・保管者	備考
1	中川原銅鐸	菱環鈕1式	横帯文	高24.2cm	洲本市中川原 ニツ石	1688~1703 (元禄)	ニツ石村の池普請 のとき、池底から 出土	南あわじ市 隆泉寺	『淡路草』では後 に打ち破き捨てると 記載
2	慶野中の御堂 銅鐸	外縁付鈕1式	4区袈裟禪文	高22.5cm	南あわじ市松 帆慶野中の御 堂	1686(貞享3)	大水により8口出 土	南あわじ市 日光寺	『宝鐸御届写』記 載を伴う
3	伝中の御堂出 土銅鐸	不明	不明	不明	南あわじ市松 帆慶野中の御 堂	1686(貞享3)		所在不明	『淡路草』記載
4	伝中の御堂出 土銅鐸	不明	不明	不明	南あわじ市松 帆慶野中の御 堂	1686(貞享3)		所在不明	『淡路草』記載
5	慶野銅鐸	外縁付鈕1式	4区袈裟禪文	高32.7cm	南あわじ市松 帆慶野中の御 堂	江戸末~明治 初	中の御堂を開墾中 に出土	慶野組・淡路 文化史料館	
6	伝淡路国出土 銅鐸	外縁付鈕2式	2区流水文	高46.0cm	(推)淡路市 江井桃川	1789~1801 (寛政)	寛政初の頃、山崩 れが起こり出土	尼崎市本興寺	隆泉寺あるいは江 井地勝寺にあった との所伝あり 島根県加茂岩倉銅 鐸と同範
7	倭文銅鐸	外縁付鈕2式	2区流水文	高44.5cm	南あわじ市倭 文庄田笹尾	1959	牧草地として開墾 中出土	東京国立博物 館	八尾市恩智垣内 山・伝大和国・津 市神戸木ノ根銅鐸 と同範
8	中条銅鐸	扁平鈕式	6区袈裟禪文	高45cm	南あわじ市広 田中条堂丸	1802(享和2)	畑中より掘り出し た	所在不明	『淡路草』記載
9	伝淡路川出土 銅鐸	扁平鈕式	6区袈裟禪文	高46.8cm	洲本市	1912	淡路川と洲本川の 合流点近くの地底 2尺のところより 出土	辰馬考古資料 館	『淡路草』記載 淡路川は存在しな い
10	伝淡路国出土 銅鐸	突線鈕1式	2区流水文	高37.3cm 鈕欠損	不明	不明	淡路在住の三宅氏 旧蔵品であったこ とから淡路出土と されている	辰馬考古資料 館	『淡路草』記載
11	幡多銅鐸	不明	不明	不明	南あわじ市榎 列上幡多	不明	岩淵という淵より 掘り出した	所在不明	『淡路草』記載
12	地頭方銅鐸	不明	不明	不明	南あわじ市神 代地頭方経所	不明	高一尺斗なる壺と 仏具花皿宝鐸を掘 り出した	所在不明	『淡路草』記載
13	賀集福井銅鐸	不明	不明	不明	南あわじ市賀 集福井大日堂	不明	覚王谷・坊ヶ谷の 名あり。近年宝鐸 など掘り出せるこ とあり	所在不明	『淡路草』記載 新田南銅鐸と同一 か
14	新田南銅鐸	不明	不明	不明	南あわじ市稲 田南	1751~1764 (宝暦)	松が池再修の時、 掘り出せり。… 松が池の山手に覚 王谷あり	所在不明	『淡路草』記載 賀集福井銅鐸と同 一か

※今回発見された銅鐸を除く。

【参 考】

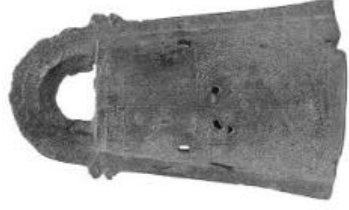
15	古津路銅剣	細形・中細形	b類	長40.6~ 45.2cm	南あわじ市松 帆古津路	1966・1969	砂採取中に出土	文化庁・兵庫 県教育委員会	14本
----	-------	--------	----	------------------	----------------	-----------	---------	------------------	-----



1 中川原銅鐸
蓋環鈕1式
24.2cm



2 慶野中ノ御堂銅鐸(日光寺)
外縁付鈕1式
22.5cm



5 慶野銅鐸
外縁付鈕1式
32.8cm



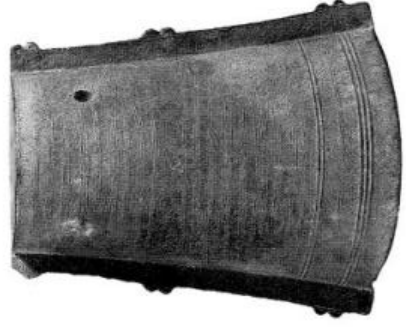
6 伝淡路国出土銅鐸(本興寺)
外縁付鈕2式
46.0cm



7 倭文銅鐸
外縁付鈕2式
44.5cm



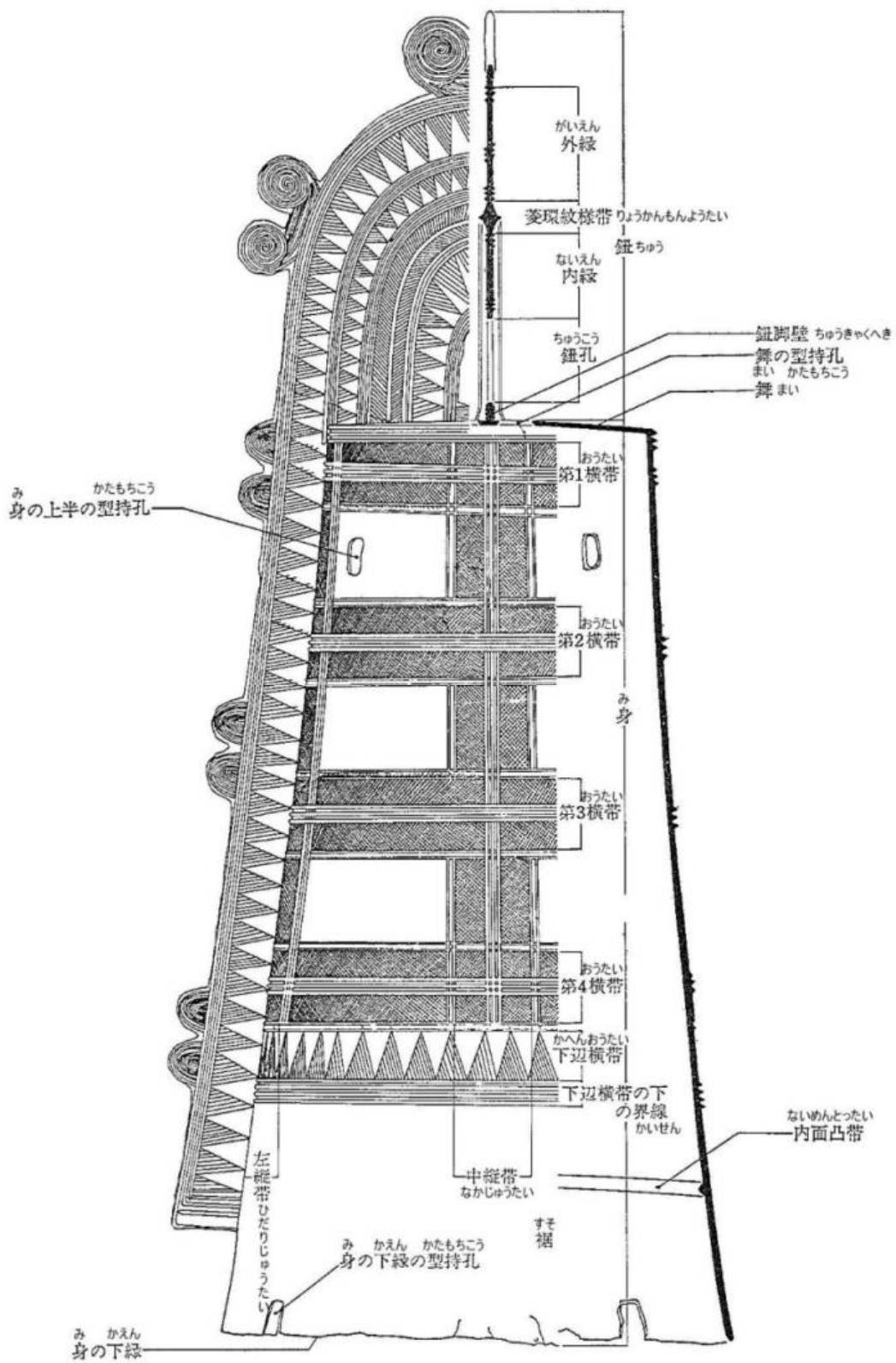
9 伝淡路川川出土銅鐸
扁平鈕式
46.8cm



10 伝淡路国出土銅鐸
突縁鈕1式
現37.3cm

現存する島内出土の銅鐸

	突線鈕式 とっせんちゆうしき					へんべいちゆうしき 扁平鈕式		がいえんのさちゆうしき 外縁付鈕式		りょうかんちゆうしき 菱環鈕式	年代
	5	4	3	2	1	2	1	2	1		
銅											横帯文 おうたいもん
鐸											2・3区
の											水
編											1区
年											文 りゆうすいもん
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区
											6区



弥生文化の研究6に加筆

南あわじ市出土の銅鐸について

兵庫県立考古博物館長 和田 晴吾

- ・淡路島の南あわじ市から銅鐸が7点も発見されてたいへん驚いた。
- ・採集された砂山のなかからの発見だったので、出土状況が明らかではないのは非常に残念だが、紛失・散逸せずに残ったのは、不幸中の幸いとでも言えようか。
- ・もともと兵庫県は銅鐸の出土例が日本で一番多いのだが、この7点を加えると、総数は60点を超すことになる（68点）。
- ・出土した銅鐸はいずれも小型の、銅鐸のなかでは非常に古い段階のものであることが注目される（銅鐸の古い段階は「聞く銅鐸」の段階というが、そのなかでも古い段階）。
- ・今回の銅鐸の出土推定地近くでは、以前にも古い時期の銅鐸や古手の銅剣（14本）が出土しているのも興味深い。
- ・米づくりが始まったころの社会における、銅鐸や武器形青銅器（銅剣など）の生産・流通・所有等をめぐる議論が活発化するものと思われる。
- ・いずれにしても、素晴らしい発見であることに間違いはないので、今回の発見を、地元をはじめ皆さんと一っしょに喜ぶとともに、調査・研究や保存処理が終わった後は、日本列島で米づくりが始まったころの社会や文化に思いをはせる縁として、大いに活用していただきたい。

兵庫県南あわじ市松帆付近出土銅鐸について

奈良文化財研究所 埋蔵文化財センター長 難波洋三

- ・銅鐸7個と舌3本以上が出土。
- ・銅鐸のうち、3組6個は大小の入れ子になっていたことを確認。
- ・入れ子3組のうち2組は入れ子状態のままであり、銅鐸の中に詰まった砂の中に銅舌が残っている可能性がある。よって、舌の数はさらに増えるかもしれない。
- ・今後、入れ子のままの2組については、CT撮影を予定している。大小の銅鐸の位置関係や中に入った舌の位置から、埋納状態が推定できると考えられる。
- ・残念ながら、移動して貯め置いた砂の中からの発見なので、銅鐸の埋納地・埋納状態・出土年などは明確でないが、南あわじ市松帆付近と考えられる。
- ・鏝の状態や砂の付着状況は、昭和41年（1966）に松帆の古津路でかつて出土した中細形B類銅剣に似ている。

（銅鐸の型式）

- ・1号銅鐸は鈕が菱環の外斜面と内斜面の2帯の文様帯で構成されており、鱗から続く文様帯がまだないので、菱環鈕式である。また、身の正面形では反りがないが、側面形では明確な反りがあるので、菱環鈕2式の中でも古式の菱環鈕2I式である。
鈕の菱環外斜面には複合鋸歯文を飾る。身には横帯文を飾り、第1横帯は上半が斜格子文、下半が複合鋸歯文、第2・3横帯は斜格子文、下辺横帯は頂角を下に向けた鋸歯文を飾る。第1横帯の上半と下半の界線、第3横帯と下辺横帯の界線、下辺横帯の下界線は複線である。
同範品はないが、範傷が目立つので、先行して鑄造された銅鐸があったと考えられる。
- ・2号銅鐸は1号鐸の中に入っていた。鈕に鱗から続く文様帯の外縁があるが、菱環文様帯はまだ成立していない段階に属するので、外縁付鈕式で、舞の型持が長方形1個であり、身の上半の型持が第2横帯に接する位置にあるので、外縁付鈕1式である。四区袈裟襷文銅鐸。
- ・3・5・6号銅鐸は外面を観察できるが、砂の付着・鑄上り不良・磨滅のために文様等が現状では明確でないが、身の上半の型持の位置や銅質からみて、外縁付鈕1式の四区袈裟襷文銅鐸と考えられる。入れ子の状態のまま取り出されていない4・7号銅鐸も、鱗や裾の型持痕の形状、錫濃度の高い青銅製と推定できることなどから、外縁付鈕1式あるいは菱環鈕2式の可能性が高い。

（銅鐸の複数個一括埋納）

- ・銅鐸には、複数個が一括埋納された例がある。最も多数の銅鐸が一括埋納された例は、島根県雲南市の加茂岩倉遺跡の39個である。これに次ぐのが滋賀県野洲市大岩山遺跡の14+9+1個の計24個、兵庫県神戸市桜ヶ丘遺跡の14個で、今回の松帆出土銅鐸はそれ

らに次ぐ多数出土で、数十年に一度の大発見といえる。

- ・今回発見された銅鐸で興味深い点は、舌を 3 本伴っていることである。前述のように入れ子の状態のままで出土した 2 組 4 個も舌を伴っている可能性があり、今後の調査で舌の総数はさらに増える可能性が高い。銅鐸が舌を伴って出土した例は非常に稀であり、これまでに鳥取県東伯郡湯梨浜町泊銅鐸の銅舌 2 本、和歌山市太田黒田銅鐸の石舌と考えられている棒状の自然石 1 個、兵庫県南あわじ市日光寺所蔵で江戸時代に慶野中御堂で出土したと伝える銅鐸の銅舌 1 本、以上のみである。舌を外して銅鐸を埋納することが普通であるのは、埋納にあたって銅鐸から祭器としての機能を奪い去ったことを示しているのであろう。興味深いのは、これまでに知られている舌を伴う銅鐸のうちの一つが今回の銅鐸の近隣地の出土品であることである。他の地域とは異なり、慶野周辺では銅舌を銅鐸とともに埋納することが一般的であったようであり、この地域の青銅製祭器埋納方法には他地域には見られない独自性があったことが伺える。そして、これは埋納主体が畿内中心部などの遠方の地域の集団ではなく、在地の集団であったことを示しているのであろう。
- ・出土した銅鐸のうち、確認できるものはすべて外縁付鈕 1 式かさらに古式であり、全高約 20～30 cm で 40 cm 以上の大型品は含んでいない。このように比較的限定された型式で構成されており、大きさにもあまりばらつきがない点は、複数個一括埋納例の多くに共通してみられる特徴である。
- ・外縁付鈕 1 式銅鐸には同範銅鐸が多くある。現状では文様が明確でないため断定できないが、今回出土した銅鐸にも島根県加茂岩倉遺跡出土銅鐸をはじめとする他の遺跡で出土した同時期の銅鐸と同範のものが含まれている可能性が高い。

(銅舌)

- ・今回見つかった銅鐸はすべて銅舌を伴っている可能性がある。3 本の銅舌は両面鑄型を使って鑄造したもので、上端近くに孔が作られている。いずれもバリが中位のやや下で見えなくなっており、この部位が打撃の繰り返しによって磨滅していることを確認できる。銅鐸の型式と舌の大きさ・形状の関係、銅鐸の型式と舌の磨滅程度の関係、銅鐸と舌の成分の検討などが今後必要となる。

(近隣地出土青銅器との関係)

- ・慶野付近では、貞享 3 年 (1686) に中ノ御堂で銅鐸が 8 個出土したとの記録があり、そのうちの 1 個が日光寺所蔵の外縁付鈕 1 式銅鐸と銅舌であるという。また、慶野では幕末・明治初にも銅鐸が出土したとの伝承があり、これが慶野組所蔵の外縁付鈕 1 式銅鐸であるという。この 2 個の銅鐸はいずれも全高 20 cm 余りの外縁付鈕 1 式であり、今回発見された銅鐸と型式が共通する。また、慶野南部の古津路では昭和 41 年 (1966) に中細形 B 類銅剣 14 本が出土している。近年の難波による元素分析で、この中細形 B 類銅剣は外縁付鈕 1 式末よりも古い時期に作られたことが明らかになっている。すなわち、慶野付近から集中出土する弥生時代の青銅器は、いずれも外縁付鈕 1 式銅鐸以前に作られた古式のものである。